

2007年3月31日

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
委員長 市原 憲厚 様

工学院大学図書館 石川敬史
国際基督教大学図書館 清水道太
国立音楽大学附属図書館 二塚恵里
広島修道大学図書館 森戸智枝

2006年度海外集合研修報告

3月11日(日)から17日(土)まで、2006年度海外集合研修に参加いたしましたので、別紙の通りご報告いたします。

以上

2006 年度海外集合研修報告書

1. 研修概要

(1) テーマ

アメリカの大学図書館の現状を知る

(2) 研修先

OCLC, OhioLINK, The Ohio State University, The Library of Congress

(3) 参加者

工学院大学図書館	石川敬史
国際基督教大学図書館	清水道太
国立音楽大学附属図書館	二塚恵里
広島修道大学図書館	森戸智枝

(4) 研修日程

2007年3月11日(日)～3月17日(土)

3月11日(日)

成田空港から渡米

3月12日(月)

* Coordination of Shu-En Tsai (Asia Pacific)

10:00-11:30 ・ Presentation on Question Point and Virtual Reference in U.S.

Ms. Paula Rumbaugh, Product Manager, Coop Reference Services

・ Discussion on Training Programs, including online tutorials for QuestionPoint

Mr. Tom Miller, Sr. Product Training & Implementation Specialist

11:45-13:30 Lunch – Hosted by Mr. Andrew H. Wang, Vice President,
OCLC Asia Pacific

13:30-14:00 Tour of OCLC

(The Smith Building, The Brown Building)

14:00-15:00 Demo and Overview of WorldCat.org

Mr. Bill Brembeck, Product Manager New Services Division

15:00-16:00 Tour of OCLC Kilgour Building

3月13日(火)

10:00-11:30 OhioLINK

meeting with Meg Spernoga (introduction to OhioLINK as a consortium)

11:40-12:30 Ackerman Library, Ohio State University

visit East Asian collection, tour Ackerman Library

12:30-13:00 Ackerman Library, Ohio State University

meeting with Barbara Dunham, Cataloging Department

(brief introduction to how OSU's collections and services are integrated with OhioLINK and how resource sharing works within the OhioLINK system)

13:00-14:30 Lunch

14:30-15:30 Sullivant Library, Ohio State University

sit in on the regular weekly meeting of Jim Bracken, Assistant Director for Collections, Instruction and Public Services(CIPS) with CIPS Coordinators:

Dona Straley, Coordinator for Collections

Jennifer Kuehn, Coordinator for Interlibrary Services
Nancy Courtney, Coordinator for Outreach and Instruction
Anne Fields, Coordinator for Reference and Research
Tony Maniaci, Coordinator for Circulation

* Attend meeting of the Coordinators of Collections, Instruction and Public Services (CIPS) with Jim Bracken, (Professor and Assistant Director, Collections, Instruction, and Public Services)

15:30-17:30 Tour of Sullivant Library, Music and Dance Library, Cartoon Research Library, Geology Library and Science and Engineering Library, Ohio State University

3月14日(水)

10:00-11:30 Business Library, Ohio State University
meet with Karen Diaz, Instruction Office
introduction to information literacy education and other instruction activities

12:00-13:00 Lunch

13:00-14:30 Fine Arts Library and Prior Health Science Library

16:45 ワシントン DC へ

3月15日(木)

14:00-16:00 The Library of Congress, John Adams Building
w/Mr. Eiichi Ito, Reference Librarian Asian Division

16:00-17:30 The Library of Congress, Jefferson Building
w/Dr. Tomoko Y. Steen, Research Specialist (Genome, Japanese S&T)
Science, Technology & Business Division

3月16日(金)

ワシントン DC から離米

3月17日(土)

帰国

2. 準備から出発まで

出発までに下記のことを行なった。

(1)事前調査

関連文献や訪問先のホームページを事前に調査した。

(2)質問事項の共有化

事前調査により、質問する内容を詰めた。概ね下記の内容にまとまった。

デジタルレファレンス、情報検索、目録、情報リテラシー教育、図書館広報

(3)事前打ち合わせ

手土産や持ち物等に関する事前打ち合わせを行なった。

3. 研修1日目(3月12日)

3.1 Presentation on Question Point and Virtual Reference in U.S.

(Ms. Paula Rumbaugh, Product Manager, Coop Reference Services)

(1)説明内容

Paula Rumbaugh 女史からはアメリカにおけるヴァーチャルレファレンスの動向および QuestionPoint システムの説明があった。

QuestionPoint のヴァーチャルレファレンスについて

- ・アメリカにおけるヴァーチャルレファレンスの需要について

アメリカでは、バーモント州ミドルベリー大学の史学部試験の誤答問題など、アカデミックライティングにおいてウィキペディアや Google などのネット上の情報を参考文献として利用しないよう指導する大学が増えている。

また、大学図書館では重度なネット利用者である大学生に図書館を利用しやすくする取組みのひとつとしてヴァーチャルレファレンスを導入している。昼夜問わず、利用できる検索エンジンの代替となるよう、24 時間のチャットレファレンスサービスを提供している大学もある。こうした背景のなか、OCLC はヴァーチャルレファレンスとして、QuestionPoint をソリューションとして提案している。

・大学図書館の体制について

ヴァーチャルレファレンスを提供することにあたり、大学図書館の体制は様々であるが、アメリカでは複数の大学が共同で提供するケースが多い。これは限られた人員で 24 時間を年中カバーすることが物理的、予算的、労働時間的に難しいためである。メリーランド州、ペンシルベニア州、オレゴン州、モンタナ州は州全体の公共図書館、大学図書館で協力体制を構築している。OhioLINK のように加盟館のみで形成するところもある。こうした共同レファレンスが抱える問題としては、レファレンスの質の維持および質問の集中がある。

QuestionPoint の提案

現在、QuestionPoint には世界 2100 館が加盟、約 13000 人の図書館員が参加している。24 時間レファレンスサービスの「24/7 Cooperative」には 1000 人の図書館員が参加している。

・バックアップ体制の充実

OCLC 職員が時間帯、質問の集中など必要に応じてヴァーチャルレファレンスをバックアップしている。これによりレファレンスの所要回答時間の目標である 2 分を実現している。

・24 時間世界をカバー

グローバルレファレンスにより地域時間的問題を解消した(米国の夜にあった質問を豪州の図書館が回答など)。現在、26 の国と地域が参加している。サイトのインターフェースは利用者用に 18 か国語(英語除く)、図書館員用に 9 か国語(英語除く)に対応している。参加している国の図書館が自国語の訳の作成に協力している。日本語は対応していない。

・質問の振り分け

質問レベルに応じて回答先を分散している。大学レベル、一般レベル、ローカルな質問など質問の回答による専門性を質問者の申告で割り当てる。必ずしも特定の図書館だけが忙しくなるわけではない。

・回答情報の再利用

過去のレファレンスの質問回答をローカルナレッジとして蓄積し、学生・図書館員の教育に役立っている。グローバルレファレンスで 15000 件、各地域・グループのレファレンスが 48000 件のデータが蓄積されている。

今後の取組み

現在は、この蓄積した情報の利用方法について検討している。

(2)感想

- ・情報の更新が激しい昨今、過去に蓄積したレファレンスをいかに役立てるかについてはレファレンスを実施している図書館ならどこでも課題としていることだろう。
- ・「検索エンジンにヒットしない情報は存在しないに等しい」という言葉が表すように学生の利用もさることながら検索エンジンはもはや学生・教職員になくはならないツールとなっている。
- ・日本の図書館員は、QuestionPoint に興味はあっても導入には消極的という印象があった。日本で 24 時間サービスは不可能、チャットにそれほど馴染みがない、図書館員に対応する余裕がないなど否定的な考えが浮かび、便利なツールであるところが業務の負担を増やすだけのもののように感じられて、面白いけれど日本で広まることはないのだろうと漠然と思っていた。しかし、このまま世界的に普及が進んでいけば、状況が変わってくるかもしれない。

- ・日本でもナレッジベースとしての観点では、同様の機能を持つ NDL のレファレンス協同データベース事業への参加が広がっている。また、データベースや電子ジャーナルへのリモートアクセスなど、Web 上のサービスが拡大している中でレファレンスサービスへの要求も出てくるかもしれない。成立するかどうかも含めて、日本的なヴァーチャルレファレンスのあり方、そのためのシステムの活用法を考えてみたいと思った。
- ・ヴァーチャルレファレンスが今のところ日本で急速に広まるようには思えない。その理由の一つは、共同でサービスを提供するという考え方や体制が十分に整っていないからだと思う。旧態依然とした図書館の中には、参考質問こそ図書館の力量が問われるところだという考えも多いと聞く。しかし、ネットワークは確実に広がり、単独 / 共同を問わずこうしたサービスはますます拡大されると思う。また、共同でサービス提供する場合は特に、蓄積されたデータをいかに有効利用するかが、提供側の負担を軽減することに繋がるのではないか。
- ・いつでも (24 時間) アクセスできることが利用者にとって重要であり、質問がある限り Librarian は回答する必要があるという姿勢はヴァーチャルレファレンスに限らず、他の図書館サービスにも通じると思う。

3.2 Discussion on Training Programs, including online tutorials for QuestionPoint (Mr. Tom Miller, Sr. Product Training & Implementation Specialist)

(1)説明内容

Tom Miller 氏から QuestionPoint のトレーニングプログラムについて説明があった。

OCLC では QuestionPoint のトレーニングプログラムを世界共通で提供している。最近のアジア地域では豪州、マカオ、韓国の図書館が導入している。プログラムでは管理者・図書館員のトレーニング以外にシステムの導入、システムの技術的トラブルのサポートも提供している。

トレーニングには 3 つの代表的なプログラムがあるが、依頼者の要望に応じて 3 つのプログラムを部分的に組み合わせて提供することもある。3 つのプログラムは下記のとおりである。

セルフペース

- ・依頼者の学習ペースに合わせて実施するプログラムコースである。
- ・どのプログラムも共通してアンケート調査を行い、システムの導入目的、導入の技術問題について分析する。
- ・依頼者にテキストを通じてシステム理解を深め、必要に応じてチュートリアルを行う。
- ・学習の過程では試験的にヴァーチャルレファレンスを行い、その経験を確認する。
- ・その後、質疑応答をもって現状の理解と実際のシステムの動作とのギャップを埋める。
- ・最後に学んだことを確認するためのアンケートを行う。

ヴァーチャル

大まかには上記のセルフペースと同じコースであるが、質問などをすべてライブミーティングやテレコンファレンスなどネット上で行う。最も安価であるため依頼が多い。

オンサイト

- ・ヴァーチャルと異なり、OCLC の指導員が直接やってきて指導する。1 セッションは 6 時間程度である。その他にも他の図書館員を教えるためのトレーナー用のコースもある。
- ・下記 URL には実際に使用するテキストなどの資料、チュートリアルの Flash データが一般に公開されている。閲覧に登録やログインは必要なく、ほぼ自己習得が可能である。

<http://www.questionpoint.org/>

- ・システムを軌道に乗せるまで (システムのセットアップ、ポリシーの設定、業務ワークフローの提案、技術サポート、コンサルティングなど) QuestionPoint を利用してもらえよう OCLC が全面的にサポートする体制を整えている。

(2)感想

- ・OCLC 商品の営業の色が濃い説明ではあったが、商品の特徴からアメリカの動向をうかがうことができた。

- ・アメリカでも Google は肯定的に捉えられている。OCLC の全サービスは「Google で検索したとき」を開始地点としていた。いかに Google の認知度を利用して依頼者や利用者を獲得するかが販売戦略上の重要点となっている。しかし、その一方で Google では見つけることのできない情報をいかにして利用者に引き合わせるかについても検討がなされている。
- ・大学図書館員に限った事ではないが、アメリカ人は多忙である。平均労働時間は世界 2 位(日本は 10 位)である。フレックスタイム制度があるが実際には早朝から仕事をしているので日本人以上に働いている。実際、朝 5 時のニュースでは高速道路の渋滞が放送されていた。大学図書館員が直面している問題は日本と同じである。学生の図書館離れ、予算の削減、人員の削減がそれである。図書館員は業務を見ると、選書から図書の装備までを各分野に 1 人の図書館員と数名のアシスタントが担当している。これはカタログリングや発注・受入などの事務作業が OCLC のシステムに組み込まれているので、「簡単にできる」作業になったため、より高度な知識を必要とする分野ごとの選書に重点を置いた組織を形成しているのだと思われる。また、人員削減を背景として、図書館員の勤務時間の節約のため導入する図書館が多い。
- ・利用者や目的に合わせて、様々な研修プログラムが用意されている。サポートをしっかりすることで OCLC が積極的にサービスの拡大に努めている様子が感じられた。
- ・また、こうしたプログラムをみると、OCLC が世界の図書館を動かしている、という自負のようなものを感じ取ることができた。それは、ただ単に図書館を動かすということではなく、Google などのように、ネットの世界で影響力を保持したいという考えの表れなのかもしれない。
- ・利用者に対してもっとプロモーションが必要だ、という発言もあった。図書館員が回答することで、単に Google を検索するよりも有益な情報を提供できるとアピールすること、そのためにそう言い切れるだけのスキルを身につけ、実績を作っていくことが重要なのだと思った。

3.3 Demo and Overview of WorldCat.org

(Mr. Bill Brembeck , Product Manager New Services Division)

(1) 説明内容

WorldCat [OCLC] [<http://www.worldcat.org/>]

- ・WorldCat のデータをウェブ上の検索エンジンに開放した Open WorldCat プロジェクトから発展し、2006 年に公開された WorldCat.org の様々な機能と今後の展望が紹介された。
- ・OCLC のミッションは「世界中の情報へのアクセスを拡大し、図書館とその利用者へのサービスを提供することで図書館のコストを削減する」ことである。情報へのアクセスを容易にするという考えのもとで公開を進めている。
- ・*Perceptions of Libraries and Information Resources*(2005)における調査によれば、人々は図書館を情報源として好意的に捉えている。しかし、特定の話題に関する情報を主としてどこから探し始めるか? という質問には、84%がサーチエンジンと答え、図書館ポータルと答えた人はたった 2%であった。 [<http://www.oclc.org/reports/2005perceptions.htm>]このギャップに対処するには、図書館が利用者の必要とするところに出て行かなければならない。WorldCat.org はそれを実現するためのものである。

WorldCat.org の機能紹介

- ・Google で本のタイトルを検索すると、検索結果の中に Find in a Library と表示される項目がある。これが WorldCat.org へリンクされている。
- ・インターフェースの言語は現在 6 種類に対応している。日本語は未対応である。
- ・画面上部にはタイトル、著者名、言語、出版事項、件名が表示され、下部は 5 つのタブを切り替えるようになっている。

Libraries : 所蔵館の検索。「Japan」など地域を入力すると、その地域にある図書館がリスト表示される。リストされるのは OCLC の参加館。利用できる地域は限られるが、IP アドレスから自動的に近くの図書館を割り出して表示する機能もある。

図書館名 その図書館の WebOPAC ,Library Information 図書館の Web サイト ,
Ask a librarian QuestionPoint (導入している場合のみ) に、それぞれリンク。

Details : 目次など。情報を追加することもできる。

Subjects : 件名

Editions : 翻訳やオーディオブックなども含め、同一作品の全ての版が表示される。FRBR 風
Reviews : レビュー。自由に追加できる。

- Cite this Item : 参照文献記述用スタイルでの表示。コピー & ペーストで利用できる。
- MARC 形式のレコードは提供していない。
- ファセット方式検索 : Author , Content , Format , Language , Year
- 詳細検索
- Did you mean : スペルミス時に正しいと推測されるスペルを表示。
- URL の記述により、WorldCat.org レコードへのリンクの作成が可能。
- WorldCat.org 検索ボックスの提供。
- WorldCat.org 検索用 Yahoo , Google , Firefox ツールバー , プラグインのダウンロード
- パートナープログラム例
 - Google、Yahoo、Ask etc.
 - Greenwood Publishing : ebook にリンク
 - Bookpage : オンライン書評、著者インタビューサイト。取り上げられた本から、WorldCat.org にリンクしている。
- フリーで提供されているデジタル画像、コレクションにリンクしている。
- OCLC Net Library を契約している場合、フルテキストにリンクしている。

- サーチエンジンから検索を始めた人たちが、WorldCat.org を開き (Click-throughs) , そこから図書館の Web サイトに行き着く (Conversions) ようにしている。
- 今後は、SNS を追加し、人々が訪れてまた戻ってきたくするようなコミュニティを作りたいと考えている。
- また、現在 WorldCat.org 2.0 , WorldCat.org 3.0 の開発が進められている。WorldCat.org 2.0 では、WorldCat を OPAC , 総合目録に代わるものと考えている。契約制のサービスとし、図書館がインターフェースや検索対象を自由にカスタマイズできるようにする予定である。
- また、WorldCat.org 3.0 は、メタサーチを実装する。図書館が契約しているデータベースを検索できるようにし、OPAC , デジタルコレクション , レファレンスデータベース , フルテキストデータベースなど全てを検索対象とする。
- [質問]フリーでアクセスできる WorldCat.org と契約制の FirstSearch の差は？
 - [回答] : WorldCat.org へのアクセスはフリーだが、自館の所蔵を表示させるためには、OCLC の Governing Members となり、所蔵を全て登録しなければならない。WorldCat.org で表示されるのは書誌レコードの一部のみ。
- OCLC では新たに、世界中の図書館を集めたダイレクトリを作成する WorldCat Registry を開始した。[<http://www.worldcat.org/registry/institutions/>]
- OCLC の参加館でなくても登録可能なので、日本の図書館もどんどん登録してほしいと話があった。

(2)感想

- Google など利用者がよく使うところにサービスを組み込んだり、様々な機能やリンクを次々に加えて行ったりと、大胆で積極的な発想が面白い。Google を敵視するのではなく、パートナーとして利用してアクセスポイントを増やし、図書館の存在を認知させるきっかけとなるようにする、プロモーションの一種と言えるかもしれない。
- 日本ではどちらかというと、図書館側からの観点では、データベースと Google とが対立している気がする。しかし、OCLC でのお話を聞くと、むしろ、どのようにしてデータベースの

クセス数を伸ばし利用者の利便性を高めるかという理念が共有され、Google や他の類似データベースとの協調、共同の姿勢を持っていることに驚いた。こうした考え方は、日本においても今後必要であろうと思う。

- ・ Web 上でフリーアクセスが可能であることから、個人向けのサービスのようにも感じていたが最終的には参加館の Web サイトに行き着くようにする、参加館に対するサービスであることになるほどと思った。
- ・ 記述レベルの問題もあり、WorldCat.org が OPAC に取って代わるころまではいかないだろうと思うが、現在の OPAC にはない機能が実現されそうな構想を聞いて、今後の展開が楽しみに思った。
- ・ 単に情報提供に限らず、Google などを partner として機関の方から利用者になづく努力をしている。さらに、WorldCat.org2.0 や WorldCat.org3.0 の開発を進め、様々な機能を付加しようとしている。こうしたことはすべて、利用者の利便性を高めることが基本にあると思う。また、こうした姿勢は OCLC のミッション「Reducing Information Costs」を体現しており、引いてはそれが図書館資料の利用に結びつくと考えられる。

4. 研修 2 日目 (3 月 14 日)

4.1 OhioLINK

meeting with Meg Spernoga (introduction to OhioLINK as a consortium)

(1) 説明内容

Ms. Meg Spernoga から、OhioLINK が提供しているサービス、運営体制などについて説明があった。

OhioLINK

オハイオ州にある 84 の大学図書館とオハイオ州立図書館からなるコンソーシアムである。

OhioLINK が提供する主なサービス

目録の提供 (Union Catalog)

電子ジャーナルやデータベースを共同購入し、提供することも重要なサービスの一つである。6400 タイトル以上の電子ジャーナルを購読し、昨年は約 500 万件の論文がダウンロードされた。利用者に、ILL サービスを通さずに資料の貸出をしている。通常、2~3 日で資料を借りることができる。また、Electronic Journal Center では映像、フィルム、ビデオなどがある。購入しているもの、寄贈されるものがある。

Chat with a librarian

4 年前から、“Chat with a librarian” というヴァーチャルレファレンスサービスを参加館の図書館員により提供してきた。しかし、コンソーシアムでヴァーチャルレファレンスを運営することは次第に難しくなっている。

Quick Search

ホームページのトップに設けている。これは、参加館が所蔵している図書とオンラインデータベースを同じトピックで一度に検索できるシステムである。

図書館員のための情報

コンソーシアムを運営していく上で、最も重要な要素になるのは、おそらく Library directors である (Director は各館の代表)。Director は定期的に会議を開いて、どんなデータベースを使うか、これからどんなサービスを提供するかを決定している。このほか、次の五つの委員会があり各々活発な活動をしている。

Library Systems and Information Technology, Circulation and ILL,

Collection Development, Reference and User Services, Technical Services

これらの委員会は、少なくとも年に数回、中には月に一度会議を持つところもある。また、メーリングリストを作っており、これが非常に有用である。メーリングリストの運用はコミュニケーションのキーになっている。

組織運営に関する体制

こうした組織を維持するときキーになることが三つある。

public funding (公的財源)

general atmosphere of cooperation (協力しようとする一般的な雰囲気)

Director の交渉力, リーダーシップ

これからのサービス

ライブラリーサービスは学生に関連しているという認識は、図書館員共通であろう。学術機関の多くの利用者が情報を求めるとき Google 検索するという研究結果もあり、今後は、より魅力あるもの、検索しやすいものにする必要がある。

(2)感想

- ・自動的に貸借のバランスが取れるシステムになっているという点に感心した。
- ・OhioLINK は NII に似ている、という指摘があり、これまで NII をコンソーシアムと比較して考えたことがなかったので新鮮に感じた。日本全国レベルで行っているようなことを州レベルで行っているということで、力の強さ、安定性がよくわかった。
- ・コンソーシアムに重要な要素として、public funding, atmosphere of cooperation, director が挙げられた。日本の私立大学の地域的なコンソーシアムは、public fundingは得られず、directorは常にいるとは限らず、atmosphere of cooperationで成り立っていると言えるのだろうか。日本のコンソーシアムと比較すると、こうした点が大きな違いである。
- ・州を基盤にしたコンソーシアムが成立し、運営されていること自体、稀有なことだと思っていた。日本ではコンソーシアムは機関別(国立大学、私立大学など)全国レベルで組織されることが多く、また活動内容も電子ジャーナルの共同購入など、ごく限られたものである。社会・文化的な違いもあるが、OhioLINK の場合は、州政府が財源を出している点も、日本との大きな違いである。お話を伺って、この種の機関が日本で育つことはあまりないだろうと感じた。
- ・コンソーシアムによるヴァーチャルレファレンスの運用が難しいのは、州レベルでの組織運用によるものではないか。
- ・組織運営のための会議のほか、様々な委員会活動が活発に行われている点にも注目したい。ホームページに、図書館員のための Information があり、サービス提供とともに、Librarian 同士が共に研鑽し、協力しあって組織を運営していこうという姿勢がうかがえる。

4.2 Ackerman Library, Ohio State University

visit East Asian collection, tour Ackerman Library

- ・Ackerman 図書館には、現在改築中の Thompson 記念図書館(通称メイン図書館)に所蔵されていた資料が保管されている。メイン図書館で所蔵されていた図書の一部は図書デポジットリに移動され、キャンパス中心部にて利用されている。
- ・巨大な図書のコレクションに加え、Ackerman 図書館にはマイクロフィルム、政府関係資料、地図、そして国際研究関係資料が保管されている。図書館にはメイン図書館にて勤務していた専門的な知識を備えた図書館員がいる。勉強環境、コンピュータ環境も提供している。
- ・貴重書・図書の修復などを担当する部門もあった。Book Arts Specialist という肩書きであった。アメリカの図書館では、資料のデジタル化などが進んでいると思っていたが、こうした伝統的な業務も展開していることに驚いた。
- ・建物は図書館の建物というより工場である。事実メイン図書館の改築に合わせて近所の工場を買い取ったのだという。空調設備の音がしていた。ただし、メイン図書館の蔵書を移転したことがあり配架されていた図書は大変多かった。サーキュレーションカウンターはすべて学生が担当している。

4.3 meeting with Barbara Dunham, Cataloging Department

(brief introduction to how OSU's collections and services are integrated with OhioLINK and how resource sharing works within the OhioLINK system)

(1)説明内容

- OhioLINK Library Catalog - Main Search Menu [http://olc1.ohiolink.edu/search/]
- OhioLINK の総合目録および OSU の OPAC に関することを中心に、PC の画面を見ながら説明がなされた。OhioLINK の総合目録の書誌レコードには、全件ではないが、目次のデータが入っている。章のタイトル、章の著者 (MARC フィールド 970 にあたる部分) から検索できるようになっている。
 - OhioLINK の参加機関のほとんどが総合目録に登録しており、検索結果に所蔵館が表示される。参加機関の構成員は、Web 上で他館からの資料取り寄せのリクエストを出すことが可能である。所属機関、名前、ID、受取場所 (OSU の場合、どの図書館でも良い) を入力すると、リクエストが相手館に送信され、2~3 日のうちには資料が届けられる。このようなコンソーシアムでのリソースシェアリングの関係は、うまく機能していると考えられている。
 - OSU で目録した資料は、OSU の OPAC でも OhioLINK の総合目録でも検索できる。OSU の OPAC を検索して求める資料が見つからなかった場合、「OhioLINK Catalog」ボタンをクリックすると、同じ条件を使用した OhioLINK の総合目録での検索結果が自動的に表示される。
 - OhioLINK では、本の他にも、データベース、電子ジャーナルなど多くのオンライン情報源が利用できる。例として、デジタル参考図書フルテキスト表示、ストリーミングビデオの再生の様子を見せていただいた。
 - 目録のレコードは、FTP を使ってサーバーとやり取りしている。この時に例として見せていただいたレコードは、マイクロのコレクションの一部で、部分のタイトルからも検索できるようにするために登録を行っているとのこと。OSU では、楽曲配信データベース Naxos Music Library に対しても、同様の試みとして、データベースに収録されている約 3,000 タイトルのレコードを登録し、OSU の OPAC から検索、再生できるようにしたという話も聞かせていただいた。

(2)感想

- OSU の OPAC と OhioLINK の総合目録が一体となって運用されており、コンソーシアムの存在が根付いている様子がよくわかった。利用者が Web 上でリクエストを出せる利便性も大きいと思う。日本でも、コンソーシアム加盟館の OPAC の横断検索システムや、OPAC から Weecat へのリンクを設定している図書館はあるが、あと一歩足りないのかもしれない。今後は、こうした仕組みを構築していくことが必要ではないかと思う。
- Naxos Music Library は、当館でも導入し、利用の促進を図っている。OPAC から直接利用できるようにしているのは、とても興味深い事例だった。
- OhioLINK ネットワークを介して利用者が直接、他館に貸借依頼ができるシステムや資料のダウンロードなど、ただただ感心するばかりである。利用する学生にとっては大きなメリットがあり、それをきっかけに図書館利用も促進されるのではないかと思う。
- 大学図書館と OhioLINK が互いに協力し合い、補完し合って非常によい関係にあり、結果的にそれが利用者へのサービス向上に繋がっている好例だと思う。

4.4 Sullivant Library, Ohio State University sit in on the regular weekly meeting

(1)説明内容

様々な試み

図書館本館の建て直しに伴い、スタッフや資料が他館に分散している。これを機会に、各館で利用者にとって使いやすい資料の配架、電子資料の選定、所蔵資料の選定・破棄など様々な新しい試みを行っている。

スタッフの編成

今まで、サーキュレーション、カタログ、電子ジャーナルなど各担当長 (Coordinator) は自

分の担当業務に没頭していた。図書館全体としてサービスや問題に取り組むために、Coordinator 全員が担当業務以外のセクションが直面している状況や取組みに参加するよう、組織編制、情報伝達、指示システムを変更した。今後は図書館全体で対応し、より効率的なサービスが求められている。特に大きな大学で多くの図書館をまとめるためには全体的な情報を図書館員が知っている必要がある。

図書館員の新たな業務

現在 Google, Wikipedia が教員や学生に利用されており、図書館員が不要であるという認識がアメリカでは広がっている。しかし実際には、図書館員はインターネットでは見つからない情報を提供することができるので、そのことをアピールすることに注力する必要がある。

そのために、図書館員に新たに聞きに来た利用者のみならず能動的に学生や教職員から要望を吸い上げることを課している。また、利用者にとっては図書館員と接する機会が少なく、図書館員を情報提供者として認識していない。図書館員から利用者に歩み寄ることが必要である。

特に情報を作成している教職員に対しては Web-CT や BlackBoard を教えることで、図書館員に論文や資料提供してもらい機会が増える。より多くの人に研究成果を見てもらうことは教員のキャリアにとってプラスになるからだ。情報を提供すること、情報を蓄積することを図書館の目的としている。

教員と連携して授業を設計

新たな制度として図書館員と授業に取り組む教員には大学から 2000 ドルが研究や授業に支給される。この制度によって図書館員が教員と知り合う機会を得ている。

学内 Wikipedia

学生が慣れ親しんでいる Wikipedia を図書館でも設置している。図書館が所蔵する情報へリンクを設定して利用者が図書館の所蔵を知る機会を増やしている。

語学に長けた図書館員の増員

OCLC にカタログングされていない外国の本の書誌情報を出版国から取得する場合、どうしてもその国の言葉がわかる職員が必要となる。たとえば日本の図書は OCLC に登録されていないものが多いので NACSIS を検索できる人、出版社への問い合わせができる人など、一定の語学力を持つ人材をスタッフとして募集している。

スキャンサービス

分館が多く、リポジトリから情報の取り出しを利用者が円滑に行えるよう、情報のスキャンおよびその配達サービスを無料で提供している。キャンパス内の大学教職員・学生に OSU Book Depository または Ackerman 図書館に所蔵されている雑誌資料であれば無料でスキャンした雑誌記事を Email にて提供している。今後は所属学生に対してどれだけ手厚いサービスを提供できるかが鍵であると考えられる。とにかく利用者に満足してもらえよう、何でも行なう。

資料の配達

サーキュレーションでは通常の貸出のほか、無料で資料の配達も行っている。キャンパス内にオフィスを持つ教職員、学生であれば届け先として「自分のオフィス」を指定することで大学図書館に登録されている依頼者のオフィスに注文の資料を届けられる。最寄りの図書館での受渡しも行っている。注文はインターネットで受けている。現在、2007 年秋に向けて学生寮への配達も検討している。意外にもあまり本の紛失が発生していない。広大なキャンパスと 20 館以上の図書館があるマンモス大学ならではの取組みである。

教員の分析

マンチェスター大学のように、学外の調査機関に教員が必要とするサービス・情報、授業の傾向の分析を依頼して図書館の方針決定の材料とする大学もある。オハイオ州立大学では Thompson 図書館の建て直しから生じた一時的な環境の変化を利用して図書館員が自らの提案を試みることでより利用者の「生の声」を聞くことや教員との信頼関係の構築に貢献している。

OSU にとっての OhioLINK

OSU は OhioLINK の参加校の一つであり、図書の共有以外にも参加したことで多くの利点が

あるという。OhioLINK は州政府からの支援金と加盟校の担当者のボランティアによって支えられている。州政府からの支援金は電子資料の購入や一般的なデータベースの購入に割り当てられている。OhioLINK が基本的なデータベースをカバーしていることで OSU 図書館はより専門性の高いデータベースや電子ジャーナルを独自の予算で購入することが可能となった。図書についても、他の加盟館が多数所蔵している図書は棚のスペースと予算の節約に貢献し、より専門性の高い図書の選書が出来るようになった。

(2)感想

- ・大学図書館においても、Google は肯定的に捉えられているが、学生をどのようにして Google 以外の情報に引き合わせるかを重視した取組みが進められている。レファレンスを 24 時間提供する取組みがその表れであると思う。アメリカではこうした取組みが進んでおり、より現実的に実行するため、インターネットを利用したシステムを通じて共同で運営する土壌が整っているようだ。
- ・“ student to student ” という新しい情報リテラシー教育の考え方が面白いと思った。少しずつでも、学生が自分たちでお互いに向上しあう関係を築き、それを図書館員がサポートできたら、本当に理想的だと思う。
- ・利用者との対話、ニーズの把握など、図書館員から教員や学生への働きかけを積極的に行おうとしている姿勢が伝わってきた。2, 3 年前に大規模な組織改革を行い、縦割りの組織から全員一体の弾力的な組織に変えたという話からも、図書館員が精力的に動いている図書館だということが感じられた。各セクションの責任者が一同に会するこうした会議を定期的で開催していることに敬服する。
- ・組織編制を変えることにより、担当業務以外のセクションの情報が入手でき、館全体を概観して業務にあたることができる。大きな組織ならではの策だと思う。
- ・大学図書館にとって、利用者の多くは学生である。その学生にとって使いやすい環境であることや、学習支援についてよく考えられている。
- ・学習支援とならんで、利用者の満足度、利用者の利便性を考えて施策を考えている。寮への図書のデリバリーサービスなどはその好例である。大学や図書館の組織の大きさは違っても、そうした考え方・発想は見習うべき点であると思う。
- ・ネットワークを利用したサービスは予想していた以上で、ネットワーク「発達」という段階は終息し、いかに利用するか、いかに他と協力して利用者サービスに役立てるかという域になっている。さらにそれを実行しているという印象を受けた。

補足：Sullivant Library の見学について

- ・2 階に入ってすぐに位置していた Learning Commons で、学生たちが学習していた。
- ・Learning Commons は、話には聞いていたが、実際に大学図書館で設けられているのを見るのは初めてだった。さらに館内にプレゼンテーションの練習ができるスペースも用意されていたのには驚いた。

4.5 Music and Dance Library

- ・音楽図書館は音楽科とダンス科の教育、研究、勉強環境を支援している。2006 年 6 月までの図書館のコレクションとしておよそ 128000 冊の図書とスコア、12000 タイトルの雑誌、5600 個のマイクロフィルム、50000 枚の CD およびカセットテープ、そして大量の DVD・VHS・コンピュータソフトを所蔵している。加えて、図書館では WOSU-FM コレクションのおよそ 20000 曲のクラシック、ジャズ、オペラ、そして American Broadcasting 社のコレクションのおよそ 16000 曲の現代音楽も保管している。
- ・見学した図書館の中で最も書架が密集している印象を受けた。天井が低く、書棚間も狭い。他の分館はすべての書架を開放しているが音楽関係の資料が多いためか、閉鎖されている書架が目立った。

- ・薄い資料も含めて多くの資料を製本しており，図書館資料に対する保存の姿勢をうかがい知ることができた。

4.6 Cartoon Research Library

(1)説明内容

- ・カートゥーン研究図書館の使命はアメリカのカートゥーン美術の総合的な研究コレクションの構築にある。図書館は 1977 年に Milton Caniff 氏から寄贈されたコレクションをもって Journalism Building の教室を利用して設立された。コレクションは寄付や寄贈を中心に増えていった。最も大きな寄付は 1992 年に United Media から寄贈された Robert Roy Metz コレクションで 113 人の漫画家による 83034 の原画集（約 910 万ドル相当）である。現在、カートゥーン研究図書館は漫画・アニメの資料において最も大きく総合的な研究機関となった。所蔵として、日本の漫画・アニメを含む 250000 の原画、34500 冊の図書、51000 タイトルの雑誌、2800 の手書き資料、そして 210 万件の漫画雑誌および劇画を保管している。

(2)感想

- ・日本の漫画コレクションを紹介していただいた。戦時中の漫画など歴史的な資料から現代の作品まで幅広く収集されていた。日本の漫画はとても人気で通常の書架に配架すると盗難にあうため、貴重書としてオフィス内に保管されていた。
- ・マンガに関する資料収集の熱意には頭が下がる。
- ・日本で良く読まれているマンガが全巻揃っており，アメリカでこのような資料が保存されていることについて，図書館の役割を改めて考えさせられた。

4.7 Geology Library

- ・地質学図書館は地球化学，自然地理学，多方面の地質学（経済・環境・歴史・層位学・構造），地形学，地球物理学，水文学，気象学，鉱物学，海洋物理学，古生物学，古植物学，古動物学，岩石学，極研究(氷河学など)，汚染(坑内排水・微量元素などの土・水)に関する 120000 巻の図書を所蔵している。地図コレクションとしてアメリカを含む世界各地の地質学・地誌的な地図を約 20 万件保管している。
- ・雑誌およびデータベースについては，400 タイトルの契約データベースに加えてオハイオ地質学調査資料から提供された 200 タイトルがある。図書館はアメリカ地質調査機関のリポジトリも請け負っている。この他にオハイオ州立大学図書館共通の 7000 タイトルの雑誌を提供している。
- ・比較的小さな図書館だったが，蔵書数は上記説明のとおりである。オハイオ州立大学図書館の分館の中で最も古い建物とのこと。建物内には化石の博物館がある。古くとも設備は充実しており、学習用パソコンや勉強環境が備わっている。建物内部は、伝統的な重厚感ある雰囲気であった。

4.8 Science and Engineering Library (図書館内のデジタルユニオンの見学)

- ・理工学図書館は物理化学，工学，建築学の総合図書館として 1993 年 1 月 3 日に建設された。40 万の合冊雑誌，3100 タイトルの雑誌，そして現在も増え続けているオンライン書誌データと雑誌タイトルを提供している。
- ・図書館の 3 階にはデジタルユニオンでは教職員・学生にデジタルおよびマルチメディア研究の環境を提供している。
- ・デジタルユニオンには，パソコン操作の支援する学生が待機している。この学生は様々なアプリケーションを解しており，学生たちのコンピュータ技能の高さをうかがわせる。

4.9 Architecture Libraryの見学

建築学図書館には 700 の建築物の建築デザインと歴史に関する 140000 件の引用文献と雑誌を

所蔵している。雑誌コレクションには 1000 タイトル以上のアメリカ、英国、大英帝国末期、南アメリカ、ヨーロッパ、日本（英語要約付）の主要な建築雑誌が含まれている。考古学、歴史、デコラティブ・アート、インテリア・デザイン、家具、景観設計、都市計画、および生活環境研究に関する図書を収集している。

図書館の建物ではあるが、施設のほとんどが学生の研究スペースに割り当てられている。物理的に学生の研究場所と図書館の書架が近いので利用が多いと思われる。

5. 研修 3 日目（3 月 14 日）

5.1 introduction to information literacy education and other instruction activities (Business Library, Ohio State University meet with Karen Diaz, Instruction Office)

(1) 説明内容

担当者

Karen Diaz 氏を含め、Instruction Office には 3 名のスタッフがいる。

基本的な考え

学生は、必要な情報を認知し、情報の見つけ方を知り、評価した上でそれを利用すると考えている。

実施しているプログラム

多くの 1 年生に提供しているオンラインによる課題がある。1 年生はその課題をしなければならない。毎年約 6000 人の新入生がいるが、そのうち 4000 人がそれを利用している。

利用者は、課題の得点もオンラインで知ることができる。得点はインストラクターにも送られる。学生はこのコースで単位を修得することができる。

Basic assignment はトピックを取り上げ、まず Google で調べる。というのは、彼らは Google に親しんでいるからである。次にトピックをデータベースで調べる。次にカタログを調べる。

net.TUTOR (URL : <http://liblearn.osu.edu/tutor/>)

これは、無料で、誰でもどこからでもアクセスできるもので、インターネットによる情報検索が上達するようつくられたプログラムである。見た目を面白く、また文章は簡単にして、利用しやすいように配慮したという。

Online Credit Courses

オンラインでプログラムを履修し、単位が修得できるコース。ARTS&CI 120D (2 単位)、ARTS&CI 121D (1 単位)、ARTS&CI 122D (1 単位) の 3 つのコースがあり、すべてオンラインで利用できる。教室で学生に会うことはない。ARTS&CI 120D を終えた学生だけが ARTS&CI 121D を履修することができる。各々オンラインで分析表を入手することができる、自分にフィードバックさせることができる。

ごく初期は、単位認定のないクラスがあったが、そのためか、学生のモチベーションが低かった。

Instruction の評価・分析

学生の大学に対する評価でフィードバックされる。学生は、コースの後、概ね満足している。

不満足 of 学生はごく僅かだ。多くの学生は満足してよい評価でフィードバックしている。

また、学生の課題の達成状況によっても、instruction を評価することができる。

図書館員が互いに Instruction を見て評価し合うというやり方もある。

Orientation

Orientation は、学生が知りたいことを伝える。Orientation では、図書館に来よう学生の注意を引くだけでよい。図書館員は多くのことを伝えようとするが、学生は全てを理解するわけではない。そういう意味では、できるだけ多くのことを学生に伝えようとする図書館員は皆 guilty だと述べられていた。

Instruction

オンライン検索のときはパソコンを持ちこんで検索させる、トピックに関係のあるビデオを見せるなどの工夫をしている。

Gateway

Instruction Office で、10年以上運営されてきたプロジェクトが Gateway to Information で、図書館のウェブサイトから利用できる。検索の仕方がわからないままウェブにアクセスした学生でも、リストから主題など必要な事項を選ぶことにより、情報検索ができるよう工夫されている。こうした Resources の提供は、アメリカの大学ではよくあることである。日本ではあまり見かけないが、無料のデータベースやソフトをダウンロードすることで、図書館員自身がこうしたものをつくることができるということであった。

Training Program

Instruction の研修については、One shot という、1日のプログラムがある。

また、外部から講師 (Speaker) を招いて研修することもある。

Ms. Karen Diaz は、毎年、大学や研究機関の図書館協会が開くプログラムで、情報リテラシーの教え方を学んでいる。このプログラムは学生の学習スタイル、プレゼンテーション技能などを網羅しており、よい経験になっているということだった。

Copyright Office

Faculty は著作権について熟知していないので、Faculty に著作権について知らせたり、利用者が資料の利用について、著作権上許可が必要なときなど、知りたい時にこのオフィスが教えてくれる。

(2)感想

- ・ コースマネジメントシステム (Carmen) を通じて行われている 3つのコースの概要が紹介されたが、実際の画面等も見せていただければもっと良かったと思う。
- ・ 学生は情報を探すのに Google や Wikipedia を使い、それで探せていると思いついていてという傾向は日本とも共通するもので、共感した。Google を使えばすぐにたくさんの情報が出てくる中で、見つけた情報の評価の仕方を教えなければならないというのも、その通りだと思う。インターネット環境下の学生の性質には日本とアメリカにあまり差はないようだが、Web 上で提供されているガイダンス、チュートリアルなどは日本ではまだ一部の大学でしか充実していない。アメリカの事例も参考にしながら発展させていける分野だと思う。
- ・ オリエンテーションは貴重な機会だから、一度にあれこれ伝えたくなくなってしまうが、学生はそんなに理解できない、興味を引いて次につなげるように、という話も、4月のオリエンテーションを前にしっかり胸に刻んでおかなければと思った。
- ・ Instruction のプログラムがオンラインで用意されていることが、まず驚きだった。このプログラムなら学生がいつでも使える上、どの利用者にも同じものを提供することができる。画面を見ると、Quiz があり楽しみながら使うことができる。様々な配慮をして作成された苦労が伺える。単位認定されるプログラム、ウェブサイトに用意された検索画面なども含め、インターネットを利用して、様々な Instruction を利用者へ提供している。
- ・ Google などのインターネット情報の利用と図書館資料の利用との問題は、どこでも避けては通れない問題になっている。Google などの情報を否定することなく、Instruction に取り入れていくことも必要だと改めて感じた。
- ・ オリエンテーションについて、図書館員はある意味、皆 guilty であるという話には、考えさせられる。反省しなければならない。
- ・ Copyright Office の存在、役割は図書館にとって非常にありがたい。昨今利用者に対して、著作権に関する利用者教育がうまくできていないように思う。私の勤務する図書館でも、2007年度から、初年次の利用者教育に必ず取り入れることにしている。

5.2 Fine Arts Library

美術図書館には、映画研究、美術教育、美術史、デザインを含む様々な視覚芸術に関する資料

を所蔵している。特に参考文献のコレクションとして美術辞書，百科事典，図書目録の収集を特徴としている。図書館の所蔵資料は一般公開しているが，大部分の資料は貸出を行っていない。

5.3 Prior Health Science Library

- ・医学図書館と関係図書館では健康に関する資料を教育者，臨床医，研究者，スタッフ，およびオハイオ州立大学学生と関係者に提供している。同時に国際社会に対して保健関連情報の提供・支援を行っている。隣接する大学病院の患者に病気の症状や治療に関する情報サービスも提供している。
- ・医学系の図書館は，電子ジャーナルが中心になり，書架に冊子体が少ないと思っていたが，そうではなかった。1950年代からの雑誌が開架されていた。冊子体もかなりの利用がある感じがした。雑誌は2フロアであったが，図書は1フロアで集密図書であった。やはり雑誌中心のフロア構成になっていた。
- ・スタンド式の検索端末で，エルゼビアの電子ジャーナルを閲覧している利用者が興味深かった。
- ・緑色の手術着のレジデントの利用が目立っていた。書架や設備については日本と同様であった。

6. 研修4日目（3月15日）

6.1 The Library of Congress Jefferson Building 見学

w/Mr. Eiichi Ito, Reference Librarian Asian Division

(1) 説明内容

アメリカ議会図書館概要

- ・議会図書館の所蔵冊数は，図書：約2900万冊，録音資料：約270万タイトル，写真・ポスター：約1200万枚，地図：約480万タイトルであり，世界最大級の図書館である。このほか，貴重な杖など博物館的資料も所蔵している。アメリカの野球カードもデジタル化し，ホームページから閲覧できる。このような図書をはじめ，博物館的資料も図書館に入ってきている。図書館で働く人は約4000人おり，組織もとても大きい。
- ・図書館は閉架式である。1970年代頃までは開架式であった。セキュリティの関係で閉架式になった。
- ・建物は，高貴な雰囲気であり，約20年前に絵画などを修復した。観光客を対象に，図書館ツアーが実施されているが，説明しているのは，ボランティアの方である。ボランティアの方々は，建物内の装飾など自分自身で勉強している。

カタログ（目録）について

- ・目録の組織はとても大きい。但し，サーチエンジンの影響により，目録への考え方が変化してきている。今後，組織改変により，目録部門が縮小していくと思われる。
- ・目録の組織は主題別言語別に分かれており，品質を保持するために監督者もいる。
- ・今後，件名（統制語）付与をどうするかが課題になってくるらしい。

アジアコレクション・部門・仕事について

- ・中国，インド，イスラム関係のレファレンス質問が多い。
- ・アジアコレクションは，図書約115万冊，雑誌約8700タイトル所蔵している。国の範囲は，中国，日本をはじめ，チベット，モンゴル，東南アジアの国々も含まれている。
- ・レファレンス司書は15名おり，Ph.D.を持っている方，アメリカで司書の資格を取得した方などがいる。
- ・来館する利用者は，その国の出身の方や研究者，議会関係者などが多い。
- ・Question Point も使用し，一日5件ほどのレファレンスがある。

デジタル化について

- ・アジアコレクションのデジタル化を進めている。例えば，奈良絵本（御伽草子など），源氏物語の写本をデジタル化している。また，中国や台湾の古典籍をデジタル化する計画を進めている。デジタル化は，全ての資料を対象にするのではなく，選定して行なっている。

- ・議会図書館内にデジタル化を行う部署がある。大学や会社と提携してデジタル化を行なっている。主に画像は Tiff 画像と JPEG 画像を作成するのがスタンダードになっている。
- ・デジタル化について、電子データの保存などについて議会図書館内で研究している部署がある。
- ・著作権については、議会図書館内に権利関係を調査する部署がある。調査が終了したものについてデジタル化をしている。

(2)感想

- ・建物が非常に美しく、グーテンベルグ聖書などの貴重資料を目にすることもでき、感動した。壁画、彫刻、置物などにはそれぞれ意味があるとのこと、とても興味深かった。
- ・建物はとても高貴な雰囲気であった。1800 年代においてアメリカが内外に知的権威を誇示することを目的としたような感じであった。議会図書館を訪れて日本の国立国会図書館と大きな違いは、こうした建物の雰囲気以外に、建物を見学する観光客がとても多かったのが印象的である。
- ・図書など従来の資料に限らず、寄贈により、ステッキや手帳など様々なものを受け入れていることを知った。(もちろん、全ての寄贈を受けているわけではないということだった。)
- ・デジタル化について、ただ闇雲に行なうのではなく、図書館が資料を選別し、権利関係も調査していることから、とても時間と労力がかかる作業であった。とりわけ、デジタル化については、その作業やコンテンツの内容について専門家に見てもらう必要がある点については、参考になった。
- ・Catalog について、シリーズ典拠の中止など最近のニュースには驚き、不可解に思っていた部分もあったが、時代に合わせて必要なもの、重点を置くものを見直しを行っているという説明をいただいて納得できた。そういう観点をふまえて、今後の動向に注目していきたいと思う。
- ・デジタル化について、全てデジタル化すればいいという方針ではなく、資料の価値、優先順位を考えて進めているという話は参考にしたいと思った。
- ・資料のデジタル化の話は興味深いものがあった。今後、遅まきながらデジタル資料の公開をしようとしているので、参考にしたい。
- ・カタログについては、Google などを意識して、どれだけデータを付加するか考えているということで、利用者を意識したデータ作成については今後考えていかなければならない。

6.2 w/Dr. Tomoko Y. Steen, Research Specialist (Genome, Japanese S&T) Science, Technology & Business Division

(1)説明内容

図書館員について

- ・議会図書館には、サブジェクトライブラリアンが多数所属している。多くの方が、Ph.D を持っており、主に議会からの質問や、Web を通して世界中からの質問に対応している。また、議会図書館に寄贈される資料の選定や外国図書を購入する際の選書も担当している。
- ・なお、普通のライブラリアンは、一般利用者からの質問に対応している。

議会図書館が力を入れていること

- ・最も力を入れている事業は、資料のアーカイブ化であった。国内の大学に委託し、デジタル化を行なっている。アーカイブを行なっている部門がある。現在は、過去の Web ページの保存について、プロジェクトをつくり研究を行なっている。

デジタルレファレンス

- ・チャット・レファレンスを行なっている。議会図書館が全米で最も積極的に行なっているという意見だった。ただし、部門によっては、やっていないところもある。
- ・チャット・レファレンスの中で、簡単に回答するものは少なく、改めてリサーチする質問が多い。そのため、他の部門へ質問を送る場合もある。
- ・デジタルレファレンスの影響がどうか、不明であるが、館内の入館者数が減った。今後、対策

が必要である。

理工系の資料

- ・ Jefferson Building の中を簡単に見学した。所蔵資料の中には、テクニカルレポート（ほとんど揃っている）や七三一部隊に関する資料、アメリカの電気製品の説明書、航空機関係の資料など、多様な資料が揃っていた。これらは、まだ登録されておらず、OPAC で検索できないという。
- ・ ホームページに、主に小学生を対象に科学的事象について「ふとした疑問」について掲載したサイトをつくったところ、注目を集めた。なお、Web の管理については、それぞれの部署で行なっている。ただし、議会図書館としてのガイドラインもあるという。

(2)感想

- ・ 「図書館にはスペシャリストが必要であり、興味のある領域で2つマスターを持つのが良い」と言われた。議会図書館には、こうしたスペシャリストが1000人程度いる。今後の日本の司書制度の参考になると思われる。
- ・ Ask a Librarian が日常業務として根付いている様子を伺うことができたが、デジタルレファレンスを始めてから Reading Room に来る人が減ったこと、そしてそれが部門縮小につながるかもしれないという話に衝撃を受けた。今回閲覧させていただいた、カタログされていないテクニカルレポートも良い例だが、来館しなければ利用できない資料、来館することで見つかる資料はもちろん数え切れないほどある。Web 上のサービスを拡大し、利便性をアピールしていくのも重要だが、同時に、Web では代替できない図書館という場の重要性を伝えるのも忘れてはならないのだと思った。
- ・ お話を伺っていて、Research Specialist としての誇りのようなものを感じた。自分もこれから学ぶべきことがいくらかでもあると痛感した。
- ・ チャットレファレンスに、世界各地から問合せがあるということで、米国内に限らず、地球規模で図書館活動が行われているのだと思った。そうした仕事を日々されているからだろうか、Dr. Tomoko Y. Steen は、ライブラリアン、特に Specialist としての誇りを持って仕事をされているように思う。
- ・ ウェブサイトでは、様々な工夫がなされていた。ウェブでのレファレンスサービスはもちろん、新しく立ち上げた American Memory などの資料の公開、Technical 部門では Q&A を作って非常に好評を得たと聞いた。
- ・ Double Background を持ってくださいという Dr. Tomoko Y. Steen のお言葉は非常に重かったが、ライブラリアンの一つの進むべき道を示しているように思う。

7. 研修を終えて

7.1 アメリカ図書館のスケールの大きさ

アメリカの図書館を肌で感じ、最も印象的だったのが図書館のスケールの大きさであった。例えば、議会図書館の歴史を感じる建築・内装・彫刻、23の図書館があり伝統的な外観で統一しているオハイオ州立大学、さらに、広大な敷地にそびえたつOCLCなどをあげることができる。また、館内がデザイン的に洗練されている図書館もいくつかあった。とりわけ、図書館内におけるライブラリアンのスペースがとても広いことが印象的であった。このような光景は、創造的な仕事ができる環境でもあるかもしれない。

しかし、こうした建物のスケールの大きさ以外にも、図書館に対する考え方についてもスケールの大きさを感じた。

それは、図書館サービスや利用者支援に対する考え方が積極的であり、かつ将来を見据えて自信を持って語っていることである。例えば、WorldCatがGoogleとリンクしGoogleの長所を活用していることや、WorldCatが今後、メタサーチを取り入れること、図書館サービスには常に利用者の利便性を考慮していること、図書館内の組織や体制が大きいにも関わらず、図書館の理念が共有されていることを感じる事ができた。

その背景には、アメリカにおいてすでに図書館の目的や使命がライブラリアンの中で、暗黙のうちに了解されているような感じがした。したがって、現在、さらには将来、図書館で実際に何に取り組みがよいのかを発見することについて時間がかからないのであろう。

時代にマッチした図書館サービスを構築していくための、時代の変化に対応できる「図書館センス」を体感することができた。

7.2 ネットワーク時代の図書館

アメリカは図書館先進国であり、日本よりも早いスピードでネットワークも発達した。ネットワークが発達せざるを得ないという地理的条件もその要因であろう。

今回見聞したアメリカ図書館の実態は、資料を読んだり考えていたりした以上に先進的だった。電子ジャーナル、レファレンス、リポジトリ、図書館間の協力、資料の提供、さらに利用者教育もウェブサイトによるものであった。

この研修を通して考えたことは様々あるが、特に次の二点について述べたい。

一点目は「利用者志向」(User Oriented)である。どの機関の研修でも、必ず「利用者」に行き着いた。資料の収集、提供、保存といった図書館としての役割はもちろんある。しかし、どんなにネットワークが発達しても、組織が肥大化しても、資料が電子化されても、中心にあるのは「利用者」だった。これは、ある意味驚きでもあった。

二点目は、Googleといったウェブ情報があふれる中で、いかに図書館の資料や情報を利用者に提供していくか、いかにその資料の有用性を利用者に伝えていくかという点である。この点では、組織によって様々な工夫がこらされていた。

オープンアクセスのウェブ情報と図書館の情報とは、互いに相容れないわけではない。共存していかなければならない面もある。相互に補完する面もないわけではない。要は、こちらの意図(うまい使いかたなど)をいかに利用者に伝えていくかである。利用者は、何でもウェブで入手できるからといって、図書館を利用しなくなるわけではない。「図書館資料なしで、研究論文は書けない」という議会図書館の方のお言葉には、実に説得力があった。

こうしたアメリカの図書館活動を実際に体感することができ、私たちが今後の図書館業務を行なううえで、大変貴重な経験になった。今回の研修を企画していただいた国際図書館協力委員会の方々、研修にこころよく送り出してくださった職場の方々に心から御礼を申し上げます。

* 付記

本報告書は、帰国後、2週間で作成したため、粗い内容になっております。詳細な内容や分析につきましては、2007年の私立大学図書館協会総会や『大学図書館研究』において報告させていただきます。

以上